様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６７７
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｈ０１２０６

研究課題名（和文）近現代美術における死生観の研究～「ヴァニタス」表象を中心に

研究課題名（英文）A Study on the View of Life and Death in the Modern Art : With special Reference to Vanitas Representations

研究代表者
香川　檀（Kagawa, Mayumi）

武蔵大学・人文学部・教授

研究者番号：１０３８６３５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ドイツで進められている、近世バロック美術の「ヴァニタス」概念を現代アートの分析に応用する研究に、国際共同研究のかたちで参加し、現代日本の美術や写真について調査したものである。17世紀オランダ静物画で描かれた「ヴァニタス（生の儚さ）」の主題は、「終わりある生」の時間意識、死を意識するがゆえの生命感情の高揚など、多様な意味をもっていた。こうしたヴァニタス概念が現代アートに「回帰」した海外の作例を踏まえ、トランスカルチャーの視点も取り入れつつ、日本人の現代美術と写真に表現された死生観や無常観をあきらかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は西洋バロック美術のヴァニタス表現を起点に、モチーフやメディウム（表現媒体）を新たにした近現代の美術を解読するだけでなく、文化や宗教も異なる日本の現代美術や写真を分析するもので、時代と文化を超えたスケールをもつものである。日独共同研究という枠組みで、本プロジェクトの成果をドイツにフィードバックでき、英語圏にも広く発信できたことは大きな意味をもっている。アートや写真について、生の儚さや移ろいの表象や、不条理な死に対する批判を読み解くことは、戦争や疫病、自然災害などに晒された現代の死生観を問い直す意義もあるといえる。

研究成果の概要（英文）：This study is an international joint research project being conducted in Germany that applies the concept of “vanitas” in early modern Baroque art to the analysis of contemporary art. The theme of “vanitas” (transience of life) in 17th century Dutch still life paintings had a variety of meanings, including a sense of time, “mortality (=life with an end),” and a heightened sense of vitality due to the awareness of death. Based on overseas examples of the “return” of this concept of vanitas in contemporary art and incorporating a transcultural perspective, this study project clarifies the Japanese view of life and death and the view of impermanence (Mujoh) expressed in contemporary art and photography.

研究分野：表象文化論、ドイツ近現代美術、日本の現代アート、記憶表象論、ジェンダー論、身体表象論

キーワード：美術　現代アート　写真　死生観　ヴァニタス　無常　国際比較　比較文化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究のテーマは、ドイツの美術研究者との交流をつうじて着想したものである。ドイツ近現代美術を専門とする本研究の代表者は、かねてより戦前の前衛芸術に、髑髏や砂時計といった 17 世紀オランダ静物画の「ヴァニタス」モチーフが現れることに関心をもっていた。2018 年にドイツ・ブラウンシュヴァイク美術大学のヴィクトリア・フォン・フレミング教授を紹介され、彼女の研究テーマである現代美術における「ヴァニタス」あるいは人生やこの世の「はかなさ」の表現を、日本の美術について調べてみないか、と提案された。それは、髑髏など美術史の定型的モチーフが現代にどのように引用・反復されているか、というポストモダンのイメージ研究を踏まえつつ、近現代における新たな意味作用の探究につながると考えられた。さらには、西洋バロック芸術の「ヴァニタス」の思想は、日本ではしばしば「虚栄（心）」という一面のみが受容されているが、じつは多義的でさまざまな連想作用を含んだ観念連合であり、それを理解したうえで、西洋とは異なる日本の「生のはかなさ」や死生観というものが現代美術や写真においてどのように表現されているか、という国際比較の研究につながるとの展望を得た。

ドイツの先行研究を吸収したうえで日本の現代美術を調査するというプロジェクトの趣旨が固まった段階で、日本在住のドイツ語を使用する美学・美術史の研究者を分担者として研究会を立ち上げ、ドイツ側のフレミング教授や在独の日本人研究者を協力者として研究体制を整えた。

２．研究の目的

本研究は、「終わりある生」をめぐる時間意識、死の偶然性や他律性、現代社会における老いや不条理な大量死など、死生観についての視覚表象を歴史的視点から読解することを目的とした。そのための最初のステップとして、ドイツで蓄積されている歴史人類学的アプローチによるイメージ研究を受容・吸収し、日本の現代美術に関する研究への応用可能性を吟味する。そして、死生観の表象という大きな問題と取り組むうえでの手がかりとして、本プロジェクトはとくに、オランダのヴァニタス画の定型表現の現代における回帰という、ドイツの先行研究が提起した分析視点を引き受け、この観点から作品を研究していく。そして、最終的には日本人の作家が表現する「生のはかなさ」や死生観の、西洋とは異なる位相を見出すことを目標とした。

キリスト教思想と西洋美術の図像学の伝統とを出発点としながらも、「ヴァニタス」表象の射程は、モダニズムやポストモダニズムの芸術のなかで意味の変容を重ねながら、多文化的な視点にたったアクチュアリティを獲得している。西洋と日本の現代芸術のなかに表現された、人生の終末の意識、戦争や自然災害や事故（人災）による理不尽な死、超高齢化社会における老い、といったテーマの視覚表象を比較検討することで、日本におけるイメージ研究に貢献するとともに、日本側の研究成果をドイツに発信することで、比較文化の視点にたった双方向的な知見の共有を目指した。

なお、ドイツの研究プロジェクトは若手研究者育成のための助成金を得ており、本研究プロジェクトにおいても、中堅や若手の研究者を主たる構成員とし、将来的に持続可能な日独研究交流のネットワーク構築を目指している。

３．研究の方法

研究期間の 1～2 年目（2020/2021 年度）はコロナ禍のためオンラインでの開催が中心となり、3～4 年目（2022/2023 年度）は現地調査や対面での研究会・シンポジウムの開催が中心となった。

（1）ドイツから提供された文献の調査：ドイツ側プロジェクトが 2018 年に刊行した成果報告集『ヴァニタス―現代の文学、美術、理論的言説における“生のはかなさ”についての省察』（ベルリン自由大学発行の学術雑誌“Paragrana”第 27 巻第 2 号）を主要なテキストとし、主要論文を分担して研究会において報告した。また、これをもとに、日本人の死生観についての文献も調査し、研究会において知識を共有した。

（2）ドイツとのオンライン・ワークショップや講演会の開催：ドイツの研究プロジェクトのリーダーであるフレミング教授には、対面やオンラインで、日本側のメンバーが行う研究発表に適宜コメントをいただいた。その他、本研究テーマに関連した専門分野に携わっているドイツの研究者 2 名に、オンラインで講演していただいた（アルマ=エリーザ・キットナー：ギーセン大学准教授／ガブリエレ・ゲンゲ: エッセン=デュイスブルク大学教授）。訪独しての現地調査では、ベルリン旧国立美術館の館長ラルフ・グライス氏による館内特別ツアーガイドで、19 世紀絵画における死生観の表現について解説いただいた。また、研究プロジェクトの 2 年目には、フレミング教授が主催するオンラインの学会に、本プロジェクトの代表者と現地協力者の 2 名が参加して日本人作家の作品について発表を行なった。

（3）国内研究者の招聘講演：日本における伝統的な死の表象について、日本美術の研究者を

招いて中世の絵巻（池田忍：千葉大学教授）や仏画の九相図（山本聡美：早稲田大学教授）について、オンライン講演会を実施した。また、現代の最先端のテクノロジーを使用した「バイオ・アート」についても専門家を招き（高橋洋介：[開催時]角川武蔵野ミュージアム・キュレーター)、作品に表現された新しい死生観について知識を提供いただいた。

（4）国内外の美術展の視察：研究対象である現代美術の最新の動向を知るために、日本国内をはじめ、ドイツで 5 年に一度開催される国際美術展ドクメンタや、隔年で開催されるイタリアのヴェネツィア・ビエンナーレなどを視察した。欧米の作家だけでなく、非西欧とりわけグローバル・サウスの国々の作家たちが、西洋美術の手法を引用しつつ新しい表現方法を開拓している点を重点的に調査した。

４．研究成果

（1）伝統的モチーフの「回帰」と現代的モチーフの「生成」

ドイツの先行研究で取り上げられた現代美術の作品を参考に、国内外の美術展やインターネット上での作品展示を調べてみると、驚くほど多数の伝統的なヴァニタス・モチーフが確認された。定番の髑髏のモチーフにしても、平板な記号として使われる場合から、西洋の解剖学や人体デッサンを暗示するモチーフとして使われる場合など、意味の幅はかなり広い。また、ビデオ作品としてオランダ静物画を模した品々や髑髏モチーフが登場する場合では、映像という時間芸術のなかで事物のうつろいや凋落が表現されていた。これらに見られる伝統的モチーフの現代への「回帰」は、文化に深く根付いた定型表現を新たなメディウムによって捉え直すことにより、生や存在のはかなさについての反省的な省察をもたらす意味作用をもっていることが確認された。

これに対し、伝統的図像としては定型化されておらず、「ヴァニタス」と形容されることもけっしてないが、近代から現代にわたる視覚芸術や文学のなかから、生のはかなさや世のうつろい、そして死を強く連想させる新しいモチーフがいくつも生み出されている。蝶とその変態、蝋人形や動物の剥製、情報のゴミと化した古新聞、女性の性の象徴としての花などがそれである。これらのモチーフは、作品の重層的な文脈のなかに置かれ、それぞれに新しい意味が付与されていくが、しばしば否定から肯定へ、嘆きから批判へ、といった意味の反転を起こすことが注目された。この点については、今後も調査を継続して意味作用の分析を深めていきたい。

さらに、日本文化をテーマにした作品や、日本人の作家による作品に焦点を当てて調査してみると、独自のヴァニタス・モチーフとして、「桜の花」や「川の流れ」があることが指摘できる。後者の「川」は、仏教の無常観を表すものとして特筆されるが、ただしドイツ・ロマン主義の風景画にも川から海へといたる水の流れに、生命と死を見る思想があることから、異文化をつなぐ共通の死生観があると想定できるかもしれない。また、花をモチーフにした日本の現代写真が欧米では「ヴァニタス」として受容され、国内では無常の概念に結びつけられることから、文化の翻訳可能性を問い直すひとつの契機となることが分かった。

全般的に、日本的な「はかなさ」の表現には、それをネガティヴなものとして否定的に提示するよりは、その短命さにこそ価値を見る肯定的な意味合い（はかなさの美学）が感じられた。ドイツとの比較研究において得られたこの知見については、今後も考察を深めていきたい。

（2）表現メディウムの時間性

現代美術の意味を読解するには、モチーフの図像学的だけでなく、イメージを造形・伝達するメディウム（媒体）のもつ意味あいも重要となってくる。絵画や彫刻だけでなく、現代美術は写真や映像、仮設型インスタレーション（空間構成）といった様々な手段や様式、素材を用いている。うつろい消えていく動画や、いっときだけ存在するエフェメラのインスタレーションは、それだけで「はかなさ」を含意している。本研究プロジェクトが調査と研究会を重ねるなかでとくにクローズアップされてきたのが、写真とテラコッタ（粘土／陶）である。

写真は従来から、生きるものを瞬間的に切断する時間性をもつゆえに死との親近性が指摘されてきたが、それだけではなく、被写体の物質性を捨象して純粋なイメージに昇華したり、瞬間を切り出すことでそれを承認したりする能力を潜在的にもっている。この写真の特性が、つねに変化してやまない現実の表現に、肯定や希望の要素をもたらすことも新たな発見であった。

一方、粘土を成型して焼成するテラコッタ彫刻による「メメント・モリ（死を想え）」の女性像や、古新聞や空き缶など廃棄物を表現したオブジェでは、土という生命を育む原初的な物質が、永続性と脆さの両面をもち、しかも死後（廃棄後）には土に還るという循環する時間を孕んでいることも、作品に重要な意味を付け加えることが指摘できる。

（3）日本人作家のインターカルチュラルな立ち位置

現代の美術家のほとんどは、欧米の美術史や芸術理論を学び、そのうえで自身の表現を開拓している。西洋の知識を咀嚼・吸収したうえで、自らのルーツに立ち帰り、日本的な死生観を仏教の無常観や、アルカイックな文化の古層に求める。そしてそこから造形したものを、西洋の文脈で再提示するという、文化を横断した創造のプロセスを辿っていることが確認された。作品に表現された日本らしさを、作家が最終的に帰属する文化へと一面的に還元してしまう本

質主義ではなく、作家が対欧米ないし国際的アートシーンに対して戦略的に選びとったものとして理解することの重要性を再認識した。

（4）テーマの今日的意義と成果公開

本研究のテーマは、現代生活における自己の死の意識化だけでなく、他者の死、それも理不尽な大量死への言及も含んでおり、戦争や疫病、気候変動による自然災害などグローバルな規模で直面する問題にも繋がっている点で、きわめてアクチュアリティにとんでいる。本プロジェクトは、そうした関心に応えるためにも、研究期間中に国内外に向けて数回にわたり研究成果を発表してきた。以下に、プロジェクトとして実施したおもな成果発表の実績を記す。今後は、ドイツの先行研究と日本側チームによる今回の研究とをまとめた学術書の刊行を目指すとともに、日独共同研究のネットワークを若手世代に引き継いでいきたい。「ヴァニタス・アート」の研究活動については、専用サイト（https://vanitas-art.com/）で随時、発信していく予定である。

【主な研究発表】

(1)　ドイツでのオンライン学会への参加：国際シンポジウム「反復としてのヴァニタス Vanitas als Wiederholung」ドイツ・ブラウンシュヴァイク美術大学研究プロジェクト「現代芸術におけるヴァニタス」主催、2021 年 5 月 7 日。（翌 2022 年に書籍化）

Mayumi Kagawa, Kaiser und Vanitas: Nobuyuki Ouras Lithografie-Serie *Holding Perspective*.（天皇とヴァニタス―大浦信行の版画連作《遠近を抱えて》）

Madoka Yuki, Vanitas in Japan? Kirschblüte in der zeitgenössischen Fotografie.（日本におけるヴァニタス？　現代写真にみる桜）

(2) 国内学会へのパネル参加：表象文化論学会第 16 回大会、東京都立大学、2022 年 7 月 2 日.

パネル 1「現代芸術における〈ヴァニタス〉モチーフ：虫・布・花」（企画＆司会：香川檀）

鈴木　賢子　「W. G.ゼーバルト『土星の環』とヴァニタス」

マーレン・ゴツィック　「糸・織り・布・服 ― 石内都の写真にみる儚さ」

結城円（オンライン参加）　「〈ヴァニタス〉といけばな――花の写真の儚さ」

(3) 米国ハーバード大学ライシャワー日本研究所との共同ワークショップ（オンライン）：「芸術と日本―ヴァニタス研究会（KAKEN）とハーバード大学の研究から」

Workshop Organizer: Yukio Lippit (Harvard University), Mayumi Kagawa (Musashi University), Yuko Nakama (Ritsumeikan/Harvard University)、2022 年 9 月 16 日

香川　檀　「天皇とヴァニタス ── 大浦信行の版画連作《遠近を抱えて》」

結城円　「ヴァニタスといけばな ── 花の写真の儚さ」

鈴木賢子　「畠山直哉の写真における生と死」

マーレン・ゴツィック　「〈命の衣〉― 石内都とオノデラユキの写真にみる時間性」

⑷ 総括としての国際シンポジウム開催

「VANITAS――現代美術と写真にみる〈生と死〉のイメージ：日独共同研究の成果から」

国立新美術館（東京・港区）、2023 年 9 月 17 日

基調講演：「現代芸術におけるヴァニタスの回帰――ドイツの芸術学が拓く新たな視座」

ヴィクトリア・フォン・フレミング：ドイツ・ブラウンシュヴァイク美術大学教授

仲間裕子　「〈消滅〉と〈永遠〉の時間・身体 ── 杉本博司の死生観とヴァニタス思想 」

鈴木賢子　「畠山直哉の写真における川の表象――〈無常〉をめぐる一考察」

結城円　「写真の間文化的な時間性――荒木経惟『TOMBEAU TOKYO』におけるヴァニタスと無常」

マーレン・ゴツィック　「ごみが化石になるとき――三島喜美代の作品における物質と時間性」

石田圭子　「草間彌生における〈ヴァニタス〉のフェミニズム的転回」

香川　檀　「居場所のはかなさ――イケムラレイコの描く〈妣（はは）の国〉と死」

（次ページに、同シンポジウムのフライヤー）

⑸ 英文学術雑誌への投稿による英語圏への発信：“The Journal of Asian Arts & Aesthetics”（臺南市美術館／Ainosco Press）,vol.9, 2023. 12

Yuko Nakama, “Sesshū's Long Landscape Scroll: Life and Death in the Cycle of the Four Seasons”, pp.21-38.

Yoshiko Suzuki, “Between Life and Death: Reading the Photographic Works of Naoya Hatakeyama”, pp.39-54.

Maren Godzik, “In a State of Liminality: Kimonos as Motifs of Temporality in the Photography of Ishiuchi Miyako”, pp.55-70.

Mayumi Kagawa, ”The Emperor and Vanitas: Nobuyuki Ōura's Series of Prints, *Holding Perspective*”, pp.71-83.

Keiko Ishida, “Life/Death and Feminism in Yayoi Kusama's Art: Focusing on Floral and Botanical Motifs“, pp.85-100.

Madoka Yuki, “Vanitas and Ikebana: Transience of Flowers and Photography “, pp.101-110.

以上

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 香川　檀	４．巻 54ー7
２．論文標題 写真に似たものーゲルハルト・リヒターの〈記憶絵画〉と女性イメージ	５．発行年 2022年
３．雑誌名 月刊『ユリイカ』青土社	６．最初と最後の頁 84-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 香川　檀	４．巻 55-3
２．論文標題 〈ネイキッド・ポートレイト〉の黎明ー男性がまなざす裸体の自我	５．発行年 2023年
３．雑誌名 月刊『ユリイカ』青土社	６．最初と最後の頁 162-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石田圭子	４．巻 125
２．論文標題 ナチズムと崇高の美学	５．発行年 2023年
３．雑誌名 神戸大学近代発行会『近代』	６．最初と最後の頁 37-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石田圭子	４．巻 126
２．論文標題 パウル・ルートヴィヒ・トロースト―ナチズム建築の起源をめぐって	５．発行年 2023年
３．雑誌名 神戸大学近代発行会『近代』	６．最初と最後の頁 151-212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡添瑠子	4．巻 13
2．論文標題 イミ・クネーベル作品における「見えないもの」と「見ること」	5．発行年 2023年
3．雑誌名 『表象・メディア研究』早稲田 表象・メディア論学会	6．最初と最後の頁 17-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鈴木賢子	4．巻 第55巻 第２号
2．論文標題 W．G．ゼーバルト『土星の環』とヴァニタス	5．発行年 2024年
3．雑誌名 武蔵大学人文学会雑誌	6．最初と最後の頁 337-358
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 結城円	4．巻 34
2．論文標題 Daido Moriyama : Pate der japanischen Strassenfotografie?	5．発行年 2023年
3．雑誌名 C/O Berlin　(Berlin: C/O Berlin Foundation)	6．最初と最後の頁 13-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 香川　檀	4．巻 第53巻第3・4号
2．論文標題 天皇とヴァニタス ;大浦信行の版画連作《遠近を抱えて》	5．発行年 2022年
3．雑誌名 武蔵大学人文学会雑誌	6．最初と最後の頁 65-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Godzik, Maren	4．巻 55(2)
2．論文標題 Der Ton der Vergaenglichkeit? はかなさの〈音／陶／トーン〉？～《そらみみみそら》－宮永愛子の陶インスタレーション	5．発行年 2024年
3．雑誌名 武蔵大学人文学会雑誌	6．最初と最後の頁 321-336
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Godzik, Maren	4．巻 Vol.21, No.1
2．論文標題 Bilderbuecher zum Thema Demenz im deutschsprachigen Raum und in Japan	5．発行年 2021年
3．雑誌名 福岡大学研究部論集　A:人文科学編,	6．最初と最後の頁 63-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石田 圭子	4．巻 56
2．論文標題 村山知義と〈春香伝〉 ： 村山の演劇論との関連から	5．発行年 2021年
3．雑誌名 国際文化学研究 ： 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要	6．最初と最後の頁 1～23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81012924	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石田 圭子	4．巻 57
2．論文標題 ヒトラーの美学を再考する ： 芸術と政治の接点をめぐって	5．発行年 2022年
3．雑誌名 国際文化学研究 ： 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要	6．最初と最後の頁 1～32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81013078	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石田 圭子	4．巻 124
2．論文標題 第三帝国の戦争画について	5．発行年 2022年
3．雑誌名 神戸大学近代発行会『近代』	6．最初と最後の頁 25～78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81013216	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計20件（うち招待講演　9件／うち国際学会　8件）

1．発表者名 香川　檀　Mayumi Kagawa
2．発表標題 天皇とヴァニタス：大浦信行の版画連作《遠近を抱えて》
3．学会等名 国際共同ワークショップ「芸術と日本：ヴァニタス研究会（KAKEN）とハーヴァード大学の研究から」ハーヴァード大学ライシャワー日本文化研究所と本科研費研究会との共同開催（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 香川　檀　Mayumi Kagawa
2．発表標題 イメージ探求のパラレル・ヒストリー：“ダダ・カップル”ヘーヒとハウスマンの“その後”
3．学会等名 国際シンポジウム「ラウール・ハウスマンとポストダダ;危機の時代のアヴァンギャル ド」上智大学ヨーロッパ研究所/科研費基盤研究（C）（代表者：小松原由理、上 智大学）（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 香川　檀
2．発表標題 ホロコーストの記憶と現代美術ーゲルハルト・リヒター《ビルケナウ》をめぐって
3．学会等名 豊田市美術館「ゲルハルト・リヒター」展関連講演（招待講演）
4．発表年 2022年

１．発表者名 マーレン・ゴツィック
２．発表標題 糸・織り・布・服――石内都の写真にみる儚さ
３．学会等名 表象文化論学会第16回大会、（パネル：現代芸術における〈ヴァニタス〉モチーフ――虫・布・花）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Godzik, Maren
２．発表標題 “Garments of Life” - Motives of Temporality in the Photography of Ishiuchi Miyako and Onodera Yuki
３．学会等名 国際共同ワークショップ「芸術と日本：ヴァニタス研究会（KAKEN）とハーヴァード大学の研究から」ハーヴァード大学ライシャワー日本文化研究所と本科研費研究会との共同開催（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 マーレン・ゴツィック
２．発表標題 ドイツ及び日本の美術に見られる老いの表現
３．学会等名 福岡大学市民カレッジ
４．発表年 2022年

１．発表者名 鈴木賢子
２．発表標題 W. G.ゼーバルト『土星の環』とヴァニタス
３．学会等名 表象文化論学会第16回大会、（パネル：現代芸術における〈ヴァニタス〉モチーフ――虫・布・花）
４．発表年 2022年

１．発表者名 鈴木賢子
２．発表標題 畠山直哉の写真における生と死
３．学会等名 国際共同ワークショップ「芸術と日本：ヴァニタス研究会（KAKEN）とハーヴァード大学の研究から」ハーヴァード大学ライシャワー日本文化研究所と本科研費研究会との共同開催（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 結城円
２．発表標題 「ヴァニタス」といけばな―花の写真の儚さ
３．学会等名 表象文化論学会第16回大会、（パネル：現代芸術における〈ヴァニタス〉モチーフ――虫・布・花）
４．発表年 2022年

１．発表者名 結城円
２．発表標題 Vanitas and Ikebana: Transience of Flowers and Photography
３．学会等名 国際共同ワークショップ「芸術と日本：ヴァニタス研究会（KAKEN）とハーヴァード大学の研究から」ハーヴァード大学ライシャワー日本文化研究所と本科研費研究会との共同開催
４．発表年 2022年

１．発表者名 結城円
２．発表標題 Artistic Interventions at Natural History Museums
３．学会等名 Online-Workshop “Space Between/ Aidagara: Landscape, Mindscape, Architecture” (University of Glasgow)（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Kagawa, Mayumi
２．発表標題 Kaiser und Vanitas : Nobuyuki Ouras Lithographie-Serie "Holding Perspektive"
３．学会等名 ”Vanitas als Wiederholung" Hochschule fuer Bildende Kuenste Braunschweig（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 香川　檀
２．発表標題 日独、女性アーティストの足跡を追って
３．学会等名 講演会「私の女性史」：科研費研究（B)「歴史的アヴァンギャルドの作品と芸術実践におけるジェンダーをめぐる言説と表象の研究」（代表：西岡茜　東京外国語大学准教授）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 仲間裕子
２．発表標題 「ドクメンタの美学と政治学」再考
３．学会等名 立命館大学国際言語文化研究所重点課題プロジェクト「風景・空間の表象、記憶、歴史」研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 石田圭子
２．発表標題 ヒトラーの芸術観を再考する：第三帝国の「美学」とは何か
３．学会等名 日本ドイツ学会第37回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Ishida, Keiko
２．発表標題 Tomoyoshi Murayama and the Korean historical play Chunhyangjeon
３．学会等名 International Conference “Modernity in Korean Art Reconsidered! “Freie Universitaet Berlin（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 岡添瑠子
２．発表標題 Blinky Palermoの壁画について
３．学会等名 「ボイスとパレルモ —— 二焦点の座談 二焦点の座談」ART TRACE PRESS 企画シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 岡添瑠子
２．発表標題 イミ・クネーベルの初期作品に関する考察 ; 戦後ドイツ美術の文脈から
３．学会等名 科研費基盤研究会「現代美術におけるヴァニタス表象」
４．発表年 2024年

１．発表者名 Yuki, Madoka
２．発表標題 Vanitas in Japan? Kirschbluete in der zeitgenoessischen Fotografie
３．学会等名 ”Vanitas als Wiederholung" Hochschule fuer Bildende Kuenste Braunschweig（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yuki, Madoka
２．発表標題 Zeigen/Nicht-Zeigen: Japanische Fotografie und Fremdheit in Deutschland
３．学会等名 ドレスデン国立美術館・ザクセン国立民族学博物館・ドレスデン・フォトテーク・ザクセン州立図書館共催オンライン・ワークショップ（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計4件

１．著者名 Mayumi Kagawa	４．発行年 2022年
２．出版社 De Gruyter (Berlin, Germany)	５．総ページ数 292
３．書名 V.von Flemming / J.C. Berger(Hg.), Vanitas als Wiederholung	

１．著者名 香川　檀	４．発行年 2023年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 209
３．書名 せんだいメディアテーク編『つくる〈公共〉50のコンセプト』	

１．著者名 結城円	４．発行年 2023年
２．出版社 九州大学大学院芸術工学研究院	５．総ページ数 -
３．書名 『栗山斉：無にみつるもの　―Nothingness is Fullness, Fullness is Nothingness―』	

１．著者名 仲間裕子	４．発行年 2021年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 246
３．書名 『フーゴ・フォン・チューディ―ドイツ美術のモダニズム』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

福岡大学　機関リポジトリ
https://fukuoka-u.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=5411&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1
国立国際美術館ニュース
https://www.nmao.go.jp/research_archive/publication/museumnews/
仲間裕子「ゲルハルト・リヒターと「炎の氷」」、『コメット通信』、23号、2022年6月、9-10頁.
仲間裕子、「」、『ゲルハルト・リヒター』、展覧会カタログ、青幻舎、リヒターの風景画とドイツ・ロマン主義2022年、108-111頁。
Yuko Nakama, “Steiniger Strand mit Anker und Mondsichel, um 1835-37”, in: Caspar David Friedrich. Wo alles begann, Ausst.-Kat., Albertinum, Die Staatlichen Kunstsammlungen Dresden. （2024年夏出版予定）

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	石田　圭子 (Ishida Keiko) (40529947)	神戸大学・国際文化学研究科・准教授 (14501)	
研究分担者	ゴツィック　マーレン (Godzik Maren) (50712444)	福岡大学・人文学部・教授 (37111)	
研究分担者	岡添　瑠子 (Okazoe Ryuko) (50803623)	早稲田大学・文学学術院・招聘研究員 (32689)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	仲間　裕子 (Nakama Yuko) (70268150)	立命館大学・衣笠総合研究機構・プロジェクト研究員 (34315)	
研究分担者	結城　円 (Yuki Madoka) (70975937)	九州大学・芸術工学研究院・准教授 (17102)	
研究分担者	鈴木　賢子 (Suzuki Yoshiko) (20401482)	京都芸術大学・その他の研究科（大学院）・准教授 (34319)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	フォン・フレミング　ヴィクトリア (von Flemming Victoria)	ドイツ・ブラウンシュヴァイク美術大学・芸術学科・教授	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 芸術と日本；ヴァニタス研究会（KAKEN）とハーヴァード大学の研究から	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 VANITAS ；現代美術と写真にみる「はかなさ」のイメージ　；　日独共同研究の成果から	開催年 2023年～2023年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	ブラウンシュヴァイク美術大学			
米国	ハーヴァード大学ライシャワー日本文化研究所			